**「満洲国」が問いかけてくるもの　　鈴木貞美**

1931年から1945年まで14年間、中国東北に存続した「満洲国」は、清朝のラスト・エンペラー、溥儀を皇帝に担いだ日本の傀儡国家として知られる。「民族協和」(harmony of races)を掲げて新国家をつくつた日本は、1920年から常任理事国をつとめていた国際連盟で孤立し、1933年３月、脱退を通告。やがて日本は「満洲国」の「民族協和」を東アジア全域に広げる「大東亜共栄圏」構想を掲げて第２次世界大戦のアジア・ステージを開いた。日本の敗北により「満洲国」は消滅、それに伴う惨劇の数々が語りつがれてきた。

「満洲国」の新国家建設は、多くの中国人の人権を無視し、犠牲を強いた。その反面、文明と文化をもたらしもした。膨大な史料を掘り起こし、その二面性を切り開いたのは「満洲国」で辛酸をなめた中国人の日本文学研究者だった。1990年頃、アメリカでは「多文化主義」が着目された。台湾でも密接な関係が考察され、韓国の研究者は、戦後の自国軍事政権の政策は「満洲国」の影が色濃いことを明らかにした。二面性は多面性に拡がり、内外で新たな研究が進展している。総合的な見直しが迫られていると思う。

まず建国経緯。**日本軍は当初、傀儡国家を計画していなかった。**1931年９月18日、満洲事変の発端を開いた関東軍の若手参謀は、軍の中央を無視して、南満洲鉄道の線路を爆破、蒋介石軍のしわざと喧伝し、占領にかかった。朝鮮駐屯軍の応援も頼んでいた。この事件で、**国際協調路線をとっていた内閣は混乱に陥った。**

ところが、関東軍の暴走を止め、関東軍と内閣のトップに**独立国家建設を指示した黒幕がいた**。**長く陸軍大臣をつとめ、当時は朝鮮総督臨時代理に就いていた宇垣一成である**(この黒幕は、ずっと暗闇に隠れていた。私が2021年の著書で明るみに出すまでは。以下、新見を交える)。

**もう一つ、予期しない動きがあった。**事変当初から、溥儀の擁立に向けて清朝旧帝政派が、張学良政権から離反した軍人政治家のあいだを奔走していた。張学良の父親、張作霖は、南は遼東湾を望み、他の三方を山岳で囲まれた広大な地域(今日の日本の約３.４倍、ウクライナの約２倍)に独立政権を築き、何度か中央に撃って出た。この父親を関東軍に爆殺された張学良は、鉄道の敷設や港湾の建設を進めるなど、日本の利権を圧迫していた。だが、急に蒋介石政権に帰属した。その転換に賛同しない有力者がいたのである。

９.18の関東軍の謀略は、張学良軍が蒋介石軍の共産勢力の討伐戦に加わった留守を狙ったものだった。蒋介石は、関東軍との戦闘を避け、主権の簒奪を国際連盟に提訴し、リットン調査団の派遣が決まった。

1931年暮、**清朝旧帝政派と張学良に背いた軍人政治家、モンゴルの族長たちが建国に向けて動きはじめ、**翌年３月、彼らが建国宣言をまとめ、新国家の主な役職を占めた。**建国宣言は「民族協和」を謳ったが、溥儀の名も政体すらも現れない。**その点をめぐって会議が紛糾し、妥結できなかった。関東軍が会議のお膳立てをし、陪席もしていたが、解決策はなかった。そこで建国式と溥儀の執政就任式を別々の日に執り行った。リットン調査団の到着までに国家の体裁だけは整えなければならなかったのだ。

関東軍は、日本の外務省の庇護を受け、天津の日本租界に暮らしていた溥儀を秘密裡に連れ出していた。溥儀に執政で我慢させ、将来の皇帝の地位と引き換えに、国防と総務庁の日本人官吏の人事権を握った(1932年９月「日満議定書」秘密公文)。日露戦争に勝利し、日本画租借権を獲得した遼東半島の関東州と満鉄付属地の守備隊に過ぎなかった**関東軍は、大いにステイタスを上げた。**その後も独断専行は止まなかった。

建国後も、「民族協和」は国是として保持された。満洲は清朝の満洲族の故郷の地で、長く他民族の立ち入り禁止にしていたが、西の高原に蒙古族が遊牧し、森林地帯にはオロチョン族が狩猟で暮らしていた。18世紀後期に漢族が流入して開墾をはじめ、回族(ムスリム)、朝鮮族、さらにソ連から亡命ロシア人が加わった。居住地ではロシア正教を奉じ、ロシア語の新聞も刊行された。ロシア帝政時代、ハルビンの建設にかかわったポーランド系により、カトリックとユダヤの教会も建てられた。当時、祖国を失っていた彼らにとって、そこは「約束の地」だった。「満洲国」は民族の区別なく亡命者を受け入れた。その裕福な層にとっては、まるで「楽園」だった。

旧帝政派は儒教を重んじ、各地の孔子廟を整え直し、古式豊かな典礼を年中行事にした。孝行息子の表彰にも道をつけた。これには近代思想を身に着けた「満人」知識層が反撥した。圧倒的多数を占める漢民族は独立国家、満州国人の意味で満人、中国語は「満語」と呼ばれた。警察官も判事もほとんどが満人だった。行政文書の形式も、まず満語、次にその日本語訳だった。日本人と朝鮮族の国籍は日本だったが、日本人の小学生は満人と机を並べ、満語(口語)も習った。満人の小学生は日本語を習った。職につくには日本語ができる方が断然、有利だった。

**日本人が行政の実権を握った方法は「内面指導」と呼ばれる。**内地から送りこまれた高級官僚(星野直樹)が総務庁長官を務め、その仕事を日本人官吏が進めた。関東州の行政との一体化も進め、国際貿易港として発展していた大連の都市建設に携わってきたテクノクラートや満鉄の技術が新国家建設に注ぎ込まれた。日本の国策会社・満鉄は一大総合企業となり、満蒙の地誌調査、学校や図書館など文化事業にも力を入れていた。

**首都・新京(長春)は、欧米の先端技術を参照し、国際的にもまれなモダン都市になった。**地域ごとに特色をつけるゾーニングを駆使し、上下水道やセントラル・ヒーティング、都市ガスも普及した。冬は凍土に覆われ、春にはぬかるむ広い大地に道路網を巡らせる工事には寒冷地に対応する技術開発が進んだ。それとは別に、関東軍周辺は、通信と情報管理の一元化を内地に先駆けて成しとげた。

1937年４月にはじまる**産業開発５ヵ年計画はソ連の真似だった**。その総指揮をとり、帰国後は内地の統制に携わった岸信介が証言を残している。総合企業満鉄を解体し、各部門を国営企業にした。が、その年７月に日中戦争が勃発し、需給の目算が狂い、急遽、計画を大幅に変更したが、予算面だけでなく、熟練工の確保もままならなかった。

日中戦争は停戦協定を結ぶ傍らから、現地で破られ、拡大した。1935年頃から**関東軍関係者が内蒙古や華北地方に親日政権を立てる工作に出て**、**小競り合いが絶えなかった。**中国軍にとっては、その延長にすぎなかったからである。

1941年７月、第２次近衛閣か「大東亜共栄圏」建設のスローガンを掲げた頃、ロシア人作家、ニコライ・バイコフの書いた、野性の虎が文明に挑む『偉大なる王(ワン)』の日本語訳が内地でベストセラーになっていた。満人作家の小説も盛んに翻訳された。「民族協和」を文字通り推進してきた人たちがいたのである。対米英戦争がはじまると関東軍報道部長は「満洲国は共栄圏の手本たれ」と叫んだ。が、隣の朝鮮と台湾では皇民化政策が進められていた。それが共栄圏の実際だった。

**「満洲国」がわれわれに突きつけてくるのは、人権と多民族共存、国際協調がまるで裏腹に進行し**たこと**だろう。**それらの相互矛盾は今日の世界のあちこちに露呈している。2022年、ロシア・ブーチン政権によるウクライナ侵攻については、いうまでもなかろう。